

白川研究 便り



2016年10月に没後10年を迎える白川静名誉所長

目次 ◆ i n d e x

立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について……………	2
国際シンポジウム「西洋・東アジアと漢字文化の出会い」報告……………	4
立命館土曜講座特集「(白川学入門)白川静再読— 白川静先生生誕一〇五周年を記念して—」の開催について……………	6
加國 尚志	
萩原 正樹	
『銀雀山漢墓竹簡(貳)』訳注作業について……………	11
高島 敏夫	
石井真美子	
漢字学研究会の活動報告……………	12
佐藤 信弥	
白川文字フォント作成プロジェクトの活動紹介……………	13
前田 亮	
白川研と福井県教育庁との共同研究について……………	14
吉田 甫	
教育活動報告……………	15
後藤 文男	
文化事業活動報告……………	16
久保 裕之	
追悼—木村一信先生の職と学問……………	18
杉橋 隆夫	
白川静先生没後一〇年を迎えるにあたって……………	19
平井嘉一郎記念図書館における……………	20
白川静文庫閲覧室の設置について……………	20

第10号
発行
16.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-466-3470
Mail toyomaji@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/
k-rsc/sio/index.html

立命館白川静記念東洋文字 文化賞の選考結果について

〈第九回〉二〇一四年度募集分

立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞

金 成 恩

(大韓民国 全南大学校 教授)

受賞理由

キリスト教関係文献に対する日本語訳や朝鮮語訳、また日本人の今田東著『実用解剖学』(明治二十年・一八八七年)の朝鮮語訳等についての詳細にして綿密な分析を通じて、東北アジア共通の漢字漢文から東北アジア諸国の近代語や語彙・文法体系がどのように再編されていったかという問題意識の下、東北アジアにおける近代知の形成に漢字漢文を通じての翻訳ルートが重要な要因として作用したことを明らかにしようとして成功している勝れた業績に対して、新設の白川賞優秀賞に値すると評価した。

受賞者の声



これまで東アジアの交流と相互理解のために漢字を中心とする文字文化は大きな役割を果たしてきました。今後ともいくら西洋化が進んでいくとしても、同時に東アジアの精神的支柱であり続け、さらに西洋にも新しい刺激を提供する文化資源であることに疑いはない

と、わたしは考えています。したがって、今回の受賞を若手研究者、外国人研究者に対する大きな励みと受け止め、その期待に答えられるよう漢字文化圏とその精神性について活発に研究を続けたいと思います。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

張 宇 衛

(台湾中央研究院語言學研究所 研究員)

受賞理由

甲骨文研究において、形態よりも音韻を通じての分析に重点を置いているのが特徴で、一定の新しい解釈を創出しており、従来と異なる勝れた読みかたに成功している。また、甲骨文の断片をつなぎあわせる作業(綴文)に取り組み、十六例の報告を出しており、古代文字学の研究者として堅実な能力を備えており、将来に期待できることに対して、白川賞奨励賞に値すると評価する。

受賞者の声

大学院に在学していた際に、白川静先生の『詩経—中国の古代歌謡』(中国語版『詩經之世界』、杜正勝訳)を閲読し、深く啓発され、それ以来『詩経』に対して強い興味を持つております。

私の主な研究分野は甲骨文字であるため、白川静先生の『甲骨文の世界—古代殷王朝の構造』(中国語版『甲骨文之世界』、温天河、蔡哲茂訳)は必読書の一冊だと考えています。

本書の中で白川先生は、卜辞を以て殷商の歴史を補足されている上に、甲骨文字について詳細な解説があります。私も本書に触発され、甲骨文字と殷商の歴史を





第9回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子（2015年3月8日、立命館大学衣笠キャンパス敬学館210教室にて）

認識し、更に白川先生の学術研究の熱意に感服している次第です。このたびの、立命館大学における受賞に対し、心から御礼申し上げます。かくなる上は誠に微力ではございますが、先生方の御信頼に應えるべく、そして白川先生の学術研究の精神を引き継ぐべく、今後も甲骨学の研究に全身全霊を傾けていく所存でございます。何卒一層の御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。重ね重ね、厚く御礼申し上げます。



金成恩氏受賞の様子



張宇衛氏 受賞スピーチの様子

選考委員

委員長 杉橋 隆夫（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究

所長）

委員 加地 伸行（衣笠総合研究機構特別研究フェロー）

下中 美都（株式会社平凡社代表取締役社長）

上野 隆三（立命館大学文学部 教授）

萩原 正樹（立命館大学文学部 教授）

※順不同

〈第八回〉二〇一三年度募集分

第八回立命館白川静賞の選考は二〇一三年九月に行われましたが、「該当者なし」との結果となりました。

国際シンポジウム

「西洋・東アジアと漢字文化の出会い」報告

加國 尚志

二〇一五年三月八日、立命館大学衣笠キャンパス敬学館二一〇号教室において、立命館大学衣笠総合研究機構の二つの研究センター、「白川静記念東洋文字文化研究所」と「間文化現象学研究センター」の共催による国際シンポジウム「西洋・東アジアと漢字文化の出会い」が開催されました。

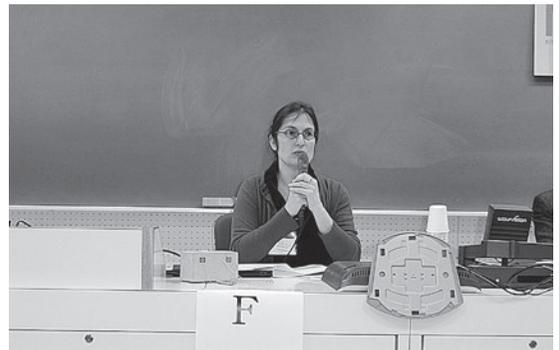
「間文化現象学研究センター」は二〇〇九年の開設以来、ヨーロッパ、アメリカ、アジア各国の研究者たちと交流しながら、異文化との出会いにおけるさまざまな文化の「あいだ」にある「間文化性」の経験を現象学的に考察する研究を行ってきました。「現象学」とは、二〇世紀ドイツの哲学者エドムント・フッサール（一八五九—一九三八）が「事象そのものへ」をモットーに、経験に即した記述から出発することを主張した哲学です。ハイデガー、サルトル、メルロ・ポンティ、レヴィナスなど、多くの哲学者に影響を与えました。

今回のシンポジウムでは、香港、韓国、フランスから漢字の研究者にお越しいただき、西洋にはない「漢字」という文字文化が、西洋で、また東アジアでどのように受け取られてきたのか、また西洋の学問の方法からどのように理解できるのか、といった観点から考察していただきました。

まず、フランス国立科学研究センター・東アジア言語研究所のフランスワーズ・ボッテロ先生が「中国渡来初期のヨーロッパ人による漢字の特徴の知覚について」と題して発表をされました。ボッテロ先生のご発表は、十三世紀から中国に渡ったイエズス会宣教師がどのように漢字について報告をしたのかを詳細に示すものでした。マテオ・リッチやアタ



沈慶昊先生発表の様子



フランスワーズ・ボッテロ先生発表の様子



司会の加國尚志先生



關子伊先生発表の様子



発表の様子



会場の様子

ナシウス・キルヒャーが漢字を象形文字としてとらえ、発音の仕方がわからなくても理解されるという事実には衝撃を受けたこと、そして彼らの報告が後に「普遍言語」を構想するヨーロッパの哲学者（ライブニッツなど）に大きな示唆を与えたことが述べられました。初めて漢字に出会ったヨーロッパ人の驚きと、それを理解しようとする試み、そしてそこから文化間の影響が生じてくる歴史を、多くの図表とともにわかりやすくお話しになりました。

つづいて香港中文大学の關子伊先生が「フッサールの範疇的直観の概念と漢字の成り立ちをめぐる意義」を発表されました。現象学の始祖

フッサールは「範疇的直観」という直観のあり方を見出しました。それは理念的なものや抽象的なものも直観する能力で、人間の言語の能力と対応しています。本来、西洋の言語構造をもとに考えられたこの直観能力を、關先生は漢字の『六書』の理解に応用できることを主張されました。詳細はここでは省略しますが、「象形」「指事」「会意」「転注」など『六書』の考え方と現象学の意味論を結びつける大胆な解釈で、東洋の文字文化と西洋の哲学との出会いの意義と可能性を示されました。

最後に韓国・高麗大学校の沈慶昊先生が「韓国における漢字文化の歴史と現状」と題してお話になりました。韓国と李朝の漢字文化受容の歴史をたどり、とりわけ日光山東照宮にある朝鮮銅鐘に刻まれた文言を解説されました。最後に現代韓国における漢字使用の現状について語られ、漢籍の調査・整理が盛んな一方で、一般の生活から漢字文化が姿を消しつつある現代韓国の文化が東アジア文化の中で孤立することへの危惧を述べられました。

三人の先生のご発表は、いずれも漢字文化が歴史的にも地理的にも非常に大きなスケールで多くの文化との出会いを経験してきたこと、そしてその経験を研究することのうちに、西洋と東アジア文化の「あいだ」で生きることの豊かさと難しさを理解する鍵があることを教えてくださいました。

多くの聴衆から熱心な質問が寄せられ、暖かい拍手で国際シンポジウムは終了しました。ご協力いただいた白川静記念東洋文字文化研究所の皆様、人文科学研究所の皆様に御礼を申し上げます、今後もこのような国際的な研究交流が行なわれることを願っております。

(立命館大学文学部教授)

立命館土曜講座特集

「白川学入門」白川静再読——白川静先生
生誕一〇五周年を記念して——の開催について

運営委員

萩原 正樹

二〇一五年四月は、白川静先生の御生誕一〇五周年に当たり、当研究所ではこれを記念して四月に土曜講座「白川学入門」白川静再読——白川静先生生誕一〇五周年を記念して——を開催した。白川静先生の学問は、その御逝去後もまったく色褪せることなく、むしろ益々輝きを増しているように思われる。先生の、甲骨金文学・中国神話学・中国思想・中国文学・日中比較文学など多岐にわたる学問は、「東洋」の自然観や人生観を考える上での大きなヒントとなり、昨今の混迷を深める「東洋」のあり方を問う鍵となるものであろう。そこでこの機会に、先生の多くの御業績の中から『中国古代の文化』、『孔子伝』、『漢字 生い立ちとその背景』、『中国の神話』を取り上げて各専門家が再読し、その内容や今日の意義について解説しようというのが今回の連続講座である。四月四日（土）から始まった本講座は、毎回二〇〇名前後の受講者が来場され、一部の回では立ち見がでるほどの盛況となり、先生の学問への関心の高さをあらためて感じさせられた。以下にそれぞれの講演の概要と受講者の声の一部を紹介し、立命館土曜講座の特集「白川学入門」白川静再読——白川静先生生誕一〇五周年を記念して——開催の報告としたい。

◆『中国古代の文化』を読む（四月四日）

村田進（本学文学部助教）

『中国古代の文化』は、白川先生が六十九歳の一九七九年に出版された。翌年には続編として『中国古代の民俗』（講談社学術文庫）も出さ

れた。本書でいう「古代」とは、白川先生自ら述べられているように（第八章）、甲骨文の時代から先秦までをいう。つまり、殷から戦国時代までの千年をはるかに越える期間において、中国文化がどのように形成され、展開していったかについて本書では述べられているのであり、取り上げられている事項は、文の理念・考古の世界・秩序の原理・原始法・巫祝の伝統・歌舞と芸能など、多岐にわたっている。このうちいくつかの事項を取り上げて、本書の歴史的・今日的な意義を再確認し、古代文化のさまざまな様相について解説した。

○受講者の声（一部）

「今から六十年前の頃に、漢字を消すような動きがあったことが思い出されます。漢字は東アジアの文化財です。今後も英語より漢字を使っていた日本語（文化）を大切にすべきである確認をしました。それにしても漢字一文字一文字に重要な意味を持っていることを学べて嬉しかったです、ありがとうございました。」

◆『孔子伝』を読む（四月十一日）

石井真美子（本学文学部准教授）

孔子は中国古代、春秋時代の末期に活躍した人物である。孔子が、その後の中国で長い間政治イデオロギーとされる儒学の祖であることは、よく知られている。しかし、果たして孔子の儒学とはその後の儒学と同じなのか、孔子の人生が本当はどのようなものだったのか、どのようにして孔子は儒学を確立するに至ったのか、などを知る人は少ない。なぜなら孔子は聖人として神格化され、その人生は後世多くの人々によって書き換えられてきたからである。孔子の言行録である『論語』の中にも、真実の孔子の姿を伝えているものと、長い時間をかけて潤色された姿が入り混じっている。

白川先生の『孔子伝』は、そういった資料の中から丹念に事実を考察し、文字学の知識をも活用しながら人間としての孔子の姿を探った研究

である。また孔子の後の戦国諸子の思想が、孔子の儒教を軸に批判と再批判を繰り返して展開されていく様子も解説されている。

本講座では、白川先生の考察による孔子の人生と、儒学の成立についての部分を抜き出して解説し、先生の研究方法の一端を紹介した。

○受講者の声（一部）

「久しぶりに大学の講義みたいな感じのお話が聞けて、とても楽しかったです。「孔子伝」は難しく体力だけで読んだ部分があったので、ポイントをまとめて説明していただけてすっきりしました。もう一度読み直してみようと思います、ありがとうございました。」

◆『漢字 生い立ちとその背景』（岩波新書）を読む（四月十八日）

高島敏夫（当研究所客員研究員）

白川先生の一般書第一作である『漢字 生い立ちとその背景』（岩波新書）を取り上げた。この本が出版されたのは一九七〇年四月二十五日。四十五年前のことである。白川静はこの『漢字』という書物を引つ提げて彗星のごとく現われた。彗星のごとくと若い人を連想するのが一般であるが、一九一〇年生まれ白川六十歳でのデビューであった。それまで専門的な論文ばかり書いていた白川の名は一般には知られていなかった。ほとんど無名といっても過言ではなかったが、白川にすれば予定通りのデビューであったという。その後矢継ぎ早に刊行される専門的な一般書によって、白川静が桁外れの大学者であることは、瞬間に世間の知るところとなった。そうした記念すべき書物なのであるが、書き出しが難しいために挫折する人が多いようである。読む心構えあるいは勘所についても交えながら、白川静の考えたことの一部を紹介した。

○受講者の声（一部）

「母が書道を教えているため、家に白川先生の著書があります。ただ白川先生の著書はまだ読んでおくことがなく、これから読み始めようというのでまず今日の講座を受けました。白川先生の人となり分かる

り、著書の概要も分かって大変有意義な時間を過ごせたと思います。」

◆『中国の神話』を読む（四月二十五日）

澁澤尚（福島大学人間発達文化学類教授）

古代の人々が自分たちをとりまく自然の驚異に神々の姿をみたとき、神話は生まれた。古代においては、どの民族もその生活の秩序の原理とすべきものを神話として伝えていたはずである。ところが、中国には十分な意味での神話的な世界はなかったといわれてきた。その物語性を極度に欠く零細な神話群は、従来「枯れたる神話」とみなされ、神話的に統一され組織化された世界をついに現さなかったというのである。しかし、はやくに高度な文字「漢字」を生み出した国が、その文化の源泉としての豊かな神話をもたなかったというのは考えにくいことである。

白川静は、それまで体系的・構造的に扱われてこなかった中国神話を、組織性のきわめて高い整理のゆきとどいた他国の神話と区別して「第三の神話」と位置づけた。

時に「神話なき国」といわれることもある中国に、はじめから神話がなかったわけではないであろう。今回の講座では、白川の名著『中国の神話』を階梯に、漢字を創りだした神聖王朝の殷が育んでいたはずの神話、特に洪水神話や崑崙伝説、また文字に刻まれた神話的世界についてその一端を紹介した。

○受講者の声（一部）

「ゆっくり、丁寧な講義であったので、整理をしながら聴講できました。予習をしていればもっとよく理解できたと思いますが、今日は「白川学」に触れたことが大きな成果でした。ありがとうございました。」

雑感…三田村泰助教授著

『宦官―側近政治の構造―』

運営委員 松本 保宣

筆者が標題の書を手にとって読んだのは、高校三年生の時である（一九七九年頃）。当時、受験生だった筆者は、不摂生な生活が祟ったのか自然気胸を患い、一ヶ月ほど入院していた。将来の不安はあったが、この機会を利用して普段読めない学術書や古典を病室で読破してやろうと思ったのである。しかし、当時から集中力散漫で意気薄弱だったので、古典文学の読破など達成できず、結局いくつかの新書本の啓蒙書を読したに過ぎなかった。そのうちの一書が、三田村先生の『宦官』である。筆者の手元にある本は「中公新書」のナンバ―7で、一九七九年発行の第四九版であり、筆者が病臥に伏していた時期と一致しているので、恐らく入院を契機に購入したものと思われる。本書の初版は一九六三年（ちなみに筆者の生年が一九六二年）なので、平均一年間に三版を重ねた計算になり、昨今の、新書が売り切れ次第絶版になる状況に鑑みると、当時すでにロングセラーであった。その後、一九八三年に同じく中央公論社より、文庫本として発行され、そして現在は再び中公新書の一冊として書肆に流通しているばかりか、電子書籍化され、PCや携帯端末で閲覧可能となっている。まさに真正正銘の「古典的名著」といえよう。筆者が翌年立命館大学に進学したのは、三田村先生のご高名を慕ってというのが、理由の一つであるが、その警咳に接し得たのは、後述する大学院に進学して特殊問題の講義を受講してからであった。

さて、本書の内容であるが、凡そ三つの部分に分けることができる。

①宦官の「製作方法」とその生熊（第一及び二章）、②漢・唐・明各王

朝の宦官の禍（第三―第五章）、③付論（終章一及び二）である。このうち、「宦官」の名を我が国の読書界に轟かせたのは、①で説かれる宦官の独特な様態であろう。残酷な去勢手術・「宦官志望者」と、念願成就して宦官の職を奉じた彼らの「変態的」心理など、宦官の存在そのものが、あまり知られていなかった一九六〇年代には、大きな反響を呼んだことは想像に難くない。しかし、本書の白眉はむしろ②の部分である。中国王朝で「宦官の禍」が熾烈を極めたのは、漢・唐・明であるが、本書で説かれる彼らの活躍の様子は、同時にこれら巨大王朝の政治史と官僚制度の良質な概説書となっている。それは当時の学界で盛んに議論され、現在でも新たな視点から回顧される「唐宋変革論」を踏まえたものであり、特に、政治・制度史分野の研究に乏しかった明代のそれは現在の目からみても極めて斬新である。筆者が大学入学後に政治制度史の研究を志したのは、或いは本書で得た知見が下敷きになったのでは、と想起される次第である。

しかしながら、一般の読者の興味は前記①の部分に集中したらしく、これは先生にとって甚だ本意なことであった。前述したように、筆者は大学院で先生の『満洲実録』の講義を受講したのであるが、閑話の際、「私は『宦官』などという本を書いたばかりに京大の先生方から、学者の仲間に入れてもらえなくなつた」、「三田村の奴は宦官などという不潔なもので本を書きおつた」などと言われたという嘆きのお言葉を承つたのである。実はそれ以前からその辺の事情について噂は聞いていたもので、意外には思わなかったものの、直接先生から何うお言葉には生々しいものがあった。ではあるが、同書の評価は筆者の学生時代、すでに不動のものとなっていたので、それは昔話として片付けられるものと、その時は思つたのである。

ところが、筆者が研究生生活に入り、ある必要に迫られて「唐代宦官論」³という学界動向を上梓した際、京大出身のY教授より論評を賜り、

その際「このような研究を出すと、一昔前だったら側目されたぞ」と仰せられたので、軽い衝撃を覚えたのであった。「へえー、なんでですか?」と、その時は殊更に知らぬふりをして尋ねたのだが、Y教授は「そりゃあー、士大夫!」と言いかけて、歯切れ悪く言葉を収められたのである。そのような訳で、三田村先生にご無念の感慨をもたらされた「先生方」とはどなたであるのか、三田村先生のお言葉を承った当時、実は想像がついていたのであるが、あらためて傍証を得た次第なのである。

ちなみに、筆者が「唐代宦官論」なる一文を草したきっかけは、「松本は、宰相・皇帝の動向ばかり扱い、唐代後半期の宦官の重要性に無理解」との、京大の若手研究者の批判に答えてのことであることを付け加えておこう。

1 その際、筆者の恩師中村喬先生により解題が附されていたのだが、残念ながら現在手元になく、再読の機会を得ていない。

2 本書は毎日出版文化賞を受賞している。

3 『立命館文学』五六二号、一九九九年、のち拙著『唐王朝の宮城と御前会議』（晃洋書房、二〇〇六年）所収。

「初期漢字研究会」の活動報告(二〇一四年度)

客員研究員 高島 敏夫

初期漢字研究会を設立して二年目に入りました。二〇一四年度も前年度に引き続き毎月一回研究会を開き、前年度以上に活発な議論の場となりました。二〇一四年度の取り組みとしては設立時に掲げた二つのテーマを追究するための土台を造るという点にありました。継続的に追究す

るテーマですから再度触れておくことにします。

一つは「殷周革命」に関する研究の深化をはかること。もう一つは西周前期に特徴的に見られるところの、文字構造に関する分析を進めること。何れも西周時代前期の金文を対象とするテーマですから、まずはこの時期の金文(銘文)の読解から始まります。この時期の金文は非常に短いものが多くて人間関係や事実関係が分りにくいため、解釈しきれないところがあります。それが歴史的事実を還元する上で困難をもたらしているのです。ただ我々の前には白川静先生の残された『金文通釈』があります。『金文通釈』では、西周前期の難解な金文を粘り強い緻密な考証によってかなり具体的に読み解かれています。『金文通釈』に示されたレベルの高さは、日中両国のどの学者の追隨をも許さぬものがあり、今なおこの方面の基本的な書物となっています。殊に西周前期の難解な金文を読み解く上で、これを活用しない手はありません。土台造りというのは『金文通釈』に提示された読解を咀嚼し、未整理の事柄を整理することにあります。これが『金文通釈検討会』です。

研究会では先ず『金文通釈』をテキストにして、何が分っていて何が分っていないのかを把握するところから始まりました。西周前期というのは「殷周革命」がなおも進行中の時代ですが、それだけに殷系氏族と周系氏族とがかなり複雑に錯綜しており一筋縄ではいきません。それでも白川先生が提示された解釈を咀嚼することを通して、次第に見えてくるものがあります。それは人と人とのダイナミックな関係です。白川先生の解釈はこうした人と人との関係を緻密に観察した上で打ち出されるものですが、そこに金文の語彙の用法を抜き取りなく抑えた語彙論の裏づけがありますので、解釈に深みがあります。我々は『金文通釈検討会』を通じて、白川先生の学問の比類なき精密さを改めて実感した次第です。

ただそれだけ終わるのでは単なる『金文通釈を読む会』で終わってし

まいます。我田引水になります。そこへ私の提示した新しい文字観を導入することによって、今まで見えなかったものが見えてくる場合があります。その文字観については拙著『甲骨文の誕生 原論』（人文書院

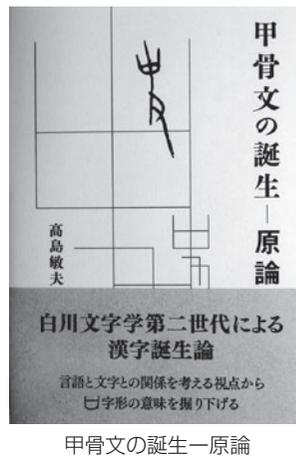
二〇一五年四月）で記しておきましたので、一読願うとして、ここで少しだけ言及しておきますと、我々が目にする甲骨文や金文はいきなり文字で書き記したのではなく、祭祀儀礼などの場において口頭で発せられた特別な口頭言語を記したものだということです。したがって口頭言語といっても日常生活で用いられる話し言葉とは異なる特殊な言語ということになります。金文に記された言語をこのように捉え直すことによって、祭祀の場も具体的に描き出すことが可能になってきます。未解明だった問題の解決にもつながります。殷周革命の具体的な様相は白川先生が築かれた土台の上に、上記の文字観を導入することによって、少し前進することができたように思います。ただ我々が心待ちにしているところの、陝西省岐山県の周公廟遺址から出土した西周甲骨の発表が今だにない点についてはいかんともしがたいところです。

もう一つのテーマである文字構造の分析については、大凡の傾向が掴めてきた状態ですが、もう少し時間をかけてからまとめに入る必要があります。しかしこうした分析の過程で分ってきたことは、文字で言葉表現する際の表現者の言語観というものに注目することがポイントになるということです。これも今後また新しいテーマをもたらししてくれるような気がしますが、現時点ではまだまだじっくり観察を続けるしかないということになります。粘り強く進めていきます。

この研究会には学生諸君も参加して非常に熱心に取り組んでいます。解読の難しい金文ですから容易に結果を出せるものではありませんが、今後とも粘り強く続けてくれれば、新しい果実が実を結ぶであろうと期待しているところです。

【Topics】 当研究所関連出版物

◆「甲骨文の誕生―原論」高島敏夫、人文書院、二〇一五年四月一〇日。白川文字学第二世代による漢字誕生論、言語と文字との関係を考える視点から「口」字形の意味を掘り下げる。



刊行予定

◆「立命館人物伝 東洋の復活 白川静―漢字の世界の新しいとびらを開いたものがたり」学校法人立命館広報課、富士山みえる作画、立命館大学白川静記念東洋文字学文化研究所監修、二〇一六年三月。非売品。白川静先生の半生をまんがで解説したものである。

◆白川静先生没後一〇年記念として、白川静先生が最後にまとめられた遺著である『漢字の大系』が立命館大学白川静記念東洋文字学文化研究所叢書一として平凡社より刊行予定である。

『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』訳注作業について

運営委員 石井真美子

二〇一四年度、橋本循記念財団の研究・調査助成金を獲得、村田進氏・山内貴氏とともに『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』の訳注を開始した。

銀雀山漢墓竹簡(以後、「銀雀山漢簡」)は一九七二年に山東省臨沂県(現臨沂市)で発掘されたもので、当時は『孫子兵法』等のほか、佚書いっしょとされてきた『孫臏兵法』と思われる書の一部などが発見されたことで大々的に報道された。しかし、銀雀山漢簡はちょうど文化大革命の混乱の頃に発掘されたこともあり、発掘・整理技術が未熟で、図版の写真も、近年発表される出土文献のカラーで鮮明な写真とは大差がある。私は二〇〇六年に臨沂市の銀雀山漢墓竹簡博物館を訪れたことがあるが、壁に七〇年代当時の整理作業の様子を写した写真が飾られ、整理作業に携わった人々の苦労が察せられた。試験管入りの、保存液に浸かった竹簡が展示されているのに大喜びして写真を撮ったが、後で聞いたところ、本物はすべて済南市の山東省博物館に保存されているとのこと、展示されていたのは精巧に作られたレプリカであった。

今回訳注を行う『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』(文物出版社)は二〇一〇年になってから出版されたもので、一九八五年の『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』の出版から隔たること二十五年である。〔壹〕が出版された当初は三部署の予定だったそうだが、〔參〕が出版されるという話は伝わってこない。〔貳〕も再編集されたものではなく、〔壹〕と同じ頃に出来上がっていた原稿の出版が滞っていたただけで、残念ながら図版も〔壹〕と同じくモノクロの不鮮明なものであった。一九八五年当時は注目を集めた銀雀山漢簡も、その後上海博物館蔵戦国楚竹簡など楚系の竹簡が多く

世に出るようになったことで、学界の関心がすっかり薄れてしまった感がある。とはいえ、銀雀山漢簡に価値が無いわけではなく、漢代初期の兵学思想を知る上で大変貴重な書である。

〔貳〕は佚篇を収録したもので、「論政論兵之類」「陰陽時令・占候之類」「其他」に分けられている。訳注は掲載順に「論政論兵之類」から始めることにし、関係があると考えられる資料の収集から始め、二〇一四年秋から具体的な訳注作業に入った。訳注作業は三名がそれぞれ行い、一ヶ月に一回程度それを持ち寄って検討する形で行っている。しかしこれが思ったより困難なものであった。「論政論兵之類」のうち数篇は七五年当時『孫臏兵法』の一部として発表され、日本でも訳注本が出されたので、改編はされているものの、ある程度はそれを参考にすることが出来る。しかし、それ以外のものは佚書なので参考にすべき書が無い。篇にもよるが、伝世の書のように多くの人の手を経て洗練されたものではなく、どこで読点を入れたら良いのかも判別しがたい、読みにくい文が多い。さらに、断片が多いため文脈から文意を取るのが難しいことも少なくない。語の解釈は多くは整理小組の注に拠よっているが、その注も根拠が示されていないことがあり、納得いかないものも時としてある。あるいは積文が本当に正しいのか、他の字の仮借字ではないのか、図版と銀雀山漢簡をはじめ出土文献の文字編や出土文献関連の仮借字字典などを見ながら検討しなおすこともしばしばである。たまに、整理小組が引いていない出典などを見つけ、一応納得のできる解釈が出来たときは、安堵あんどすると同時にこの作業も多少は意義のあるものになったと感じているような次第である。

かつて拙稿で論じたが、〔貳〕の佚書は同じような内容の文が複数見られる等、謎が多い。訳注ははじめたばかりで、順次『學林』(中国芸文研究会)に掲載しているが、今後継続して、少しでもこの書の謎の解明に近づくことができると考えている。

漢字学研究会の活動報告

客員研究員 佐藤 信弥

漢字学研究会は二〇一二年四月より立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の研究部門となりました。関西学院大学大学院文学研究科教授の木村秀海先生を会長とし、白川静『金文通釈』の続編、『金文通解』を作ることを課題として、近年新たに出土した金文（青銅器の銘文）の訳注制作に取り組んできました。そして金文研究を中心とする学術雑誌『漢字学研究』を発行しています。

二〇一四年八月に木村会長が急逝され、新たに大形徹氏（大阪府立大学大学院人間社会科学研究所教授）を研究代表とし、当研究所客員研究員の馬越靖史氏と佐藤の二名を幹事として再出発することとなりました。これとともに湯浅邦弘氏（大阪大学大学院文学研究科教授）を中心とする中国出土文献研究会と連携し、戦国竹簡を主な研究対象とする研究者にもご参加頂くようになりました。現在の金文研究には、殷代の甲骨文字とともに戦国竹簡に見える戦国文字の知見が不可欠となっているからです。また二〇一五年五月より金文研究の松井嘉徳氏（京都女子大学大学院文学研究科教授）の参加を得ました。

第九号の活動報告で募集していた若手メンバーについては、山田崇仁氏（立命館大学非常勤講師）と落合淳思氏（当研究所客員研究員）に加え、中国出土文献研究会の福田一也氏（大阪大学大学院文学研究科懷徳堂研究センター教務補佐員）や草野友子氏（京都産業大学特約講師）、そして中国古代天文学専攻の前原あやの氏（関西大学非常勤講師）といった研究者の参加を得ています。最近は女性の会員も増えています。

毎月一回（原則的に第三土曜日）、主にキャンパスプラザ京都で例会

を開催しています。引き続き会員を募集しておりますので、漢字研究に関心をお持ちの方は佐藤 (satoshin@sun-inet.or.jp) まじりご連絡下さい。現在は例会での新出金文講読に加え、この分野の裾野を広げるべく、金文を含めた中国出土文献全体の研究入門の作成を検討中です。

『漢字学研究』の最新号となる第三号は二〇一五年八月に刊行されました。今号は殷代の甲骨文・金文を研究しておられる崎川隆氏（吉林大学古籍研究所副教授）に寄稿して頂きました。『漢字学研究』は会員の研究活動発表の場としてだけではなく、関連分野を研究されている外部の方にも執筆して頂くようにしています。それが日本ひいては世界の漢字学の発展に寄与すると考えているからです。そのため、ひろく漢字学研究者の論考の投稿（査読あり）も受け付けております。投稿を希望される方は、印字原稿とデータファイルを研究所事務局宛てにお送り下さい。



漢字学研究会例会の様子



2015年9月に開催の木村秀海先生をしのぶ会より

白川文字フォント作成プロジェクトの 活動紹介

前 田 亮

白川文字フォント作成プロジェクトでは、これまでコンピュータ上で利用が困難であった甲骨・金文などの古代文字を、Microsoft Wordなどの一般的な文書作成ソフトで簡単に利用できるようにするために、「白川文字フォント」の開発を進めています。

本フォントの特徴としては、標準の文字コード規格 (Unicode) に準拠することにより、現代の漢字を入力すると同じように、簡単に古代文字の入力ができることを目指しています。

フォントの作成作業は、次の手順で行っています。

1. 古代文字関連書『漢字類編』『常用字解』『人名字解』の原本の各ページをスキャン。
2. スキャンしたページ画像から、画像編集ソフトを用いてフォント化対象の文字を囲む矩形領域を選択し、文字ごとに画像データとして保存 (図1)。
3. 保存した各文字の画像から自動的に文字の輪郭を抽出し、アウトライン形式に変換 (図2)。
4. 対象とするすべての文字・字体を1つにまとめて標準的な文字フォント形式に変換。

これらの作業は、当研究室専門研究員のビルゲサイハン・バトジャール氏が作業手順の設計および作業環境の準備を行い、実際のフォント作成作業は当研究室の学生アルバイトによって行っています。完成したフォントは、フリーのフォントとして一般に公開し、誰でも自由に使用していただけるようにする予定です。フォントの公開により、白川文字学に関わる研究や漢字教育などに広く活用されることを願っています。

(立命館大学情報理工学部教授)



図1：白川文字フォントの作成作業の様子



図2：書籍からスキャンした状態の文字 (左) と、それをアウトライン化したもの (右)

白川研と福井県教育庁との 共同研究について

客員研究員 吉田 甫

吉田と申します。この三年ほど白川研究所の研究に携っております。とは言え、私の専門は教育心理学です。なぜそんな門外漢の人間が白川研での研究といぶかしく思われる方がいらつしやるかと思えます。そもそもその始まりは、サトウタツヤ研究部長から、私の立場を基にして何か共同で研究ができるのではないか、考えてくれという要請でした。研究所の中で話をする内に、福井県では白川文字学を下敷きにした漢字教育を展開しているということをお聞きしました。立命館小学校でそうした授業をやったというニュースを見ていたので、私の立場から研究ができる、というか白川文字学を下敷きにした漢字教育とはそもそもどんな教育なのか、またそうした教育から子どもは何を学んでいるのかという疑問が湧いてきました。加えて白川文字学を実際に子どもに教えている漢字探検隊が日本全国を股にかけて活躍しているということを知って、教育心理学という視点で研究ができると思い、研究チームを立ち上げた訳です。とは言っても、正直なところ、白川先生の業績は時折のニュースで読む程度の知識しかなく、そんな人間で研究できるかと心配しました。しかし幸いにも、研究代表者として萩原先生が参加していただくことになり、漢字探検隊を進めている後藤先生、久保さんなどの共同研究チームができました。

研究としては、子どもたちが漢字学習を通して身につけている力が明らかになるような独自の漢字問題を作成し、福井県内の協力校で調査に取り組んでいます。また、滋賀県内の通常の漢字学習を行っている学校

にも協力を仰ぎ、漢字調査を行っています。白川文字学をもとにした漢字教育との違いが明らかになればと考えています。

研究調査は順調に始まったように見えますが、1年目は試行錯誤の連続でした。そもそも白川文字学による教育効果を検証することが出来る漢字問題とはどのような問題なのか、そのこと自体から考えなければならなかったからです。「成り立ちとつながり」を通して漢字を学ぶ特徴から、あらかじめ子どもたちが獲得する「力」を想定して、問題作りに取り組みました。福井県教育庁の先生方とも話し合いをして、何とか問題を確定して調査をスタートさせることが出来ました。全くの手探りでした。二年目になると、かなり様子が分かってきて、白川文字学に特化した問題がある程度は作成できるステップにいたりました。二〇一五年の三月におこなった調査からは、福井の子どもの優位性が少しずつ明らかになってきました。しかしまだ道半ばです。その優位性がどこにあるかが実証されれば、これまでの暗記を主体にした漢字教育から意味を主体にした漢字教育へと、教育の方向を転換できるかもしれません。そうした遠い先のことを考えながら、現在研究中です。



福井県の小学校で用いられている副教材

教育活動報告（二〇一五年度）

白川文字学教育リサーチャー 後藤 文男

○白川静の「漢字ワールド」にふれよう！

二〇一五年四月から衣笠キャンパスを訪問する小中学生を対象に、白川先生の漢字の世界を体験する新しいイベント講座を開設しました。一回の講座は約五〇分。内容は、前半が「漢字世界の巨人 白川静」の紹介、後半は金文をトレーシングペーパーに写し取る「トレース体験」となっています。

会場には、白川先生の字書三部作のほか、普段なかなか見ることのない甲骨片や青銅器のレプリカなども展示し、直に手に取って見てもらったりしています。

事前申し込み制ですが、今年度は中学生を中心にすでに六五〇名ほどの児童・生徒たちが受講しました。どの生徒たちも学校で習う漢字学習とは一味違った「漢字の成り立ち」から学ぶ漢字学習に強い関心を寄せてくれます。まだ始めたばかりですが、これからも、衣笠キャンパスを訪問する小・中・高生に、立命館が生んだ偉大な学者白川静とその先生が残した白川文字学について、少しでもわかりやすく伝えていけるよう

内容を工夫しながら取り組みを進めていきたいと考えています。



トレース体験



授業のひとつコマ

○「ミニ白川静巡回展」を開催！

附属校の先生方による「白川式漢字学習法開発WG」の活動も二年目に入り、現在授業用テキストの作成に取り組んでいます。併せてそれぞれの学校で白川文字学をもとにした漢字学習の実践をスタートさせる取り組みも進めています。北海道にある立命館慶祥中高で八月三十一日に開催された附属校の国語科公開研究会で、WGメンバーの一人津藤純子教諭による中学一年を対象とした『白川漢字で学ぶ漢字の成り立ち、漢字の仲間』というタイトルの公開研究授業が行われました。白川文字学をもとにした漢字学習が、生徒たちに驚きと新しい発見をもたらすことを多くの国語科の先生方に授業を通して実感していただけたのではないかと思います。

この公開研究会に併せて立命館慶祥中高では、八月三十一日から九月一日まで「ミニ白川静展」が開催されました。白川先生の足跡をたどるパネル二〇枚と白川先生自筆の原稿、色紙額、甲骨片や青銅器のレプリカなどの展示を中心としたミニ展ですが、「白川先生」について学ぶための貴重な機会となりました。

この「白川静展」は立命館慶祥中高を皮切りに立命館守山中高、立命館小学校、立命館宇治中高、立命館中高、初芝立命館中高の順で、一一月下旬までの約三ヶ月間に渡って「巡回展」として開催しました。

各附属校、連携校では「白川静展」を機に、WGメンバーを中心に授



立命館慶祥中高での展示



立命館小学校での様子

業の実践にも取り組み、「白川文字学」をもとにした漢字教育を進めていく大きな足がかりを作ることが出来ました。

文化事業活動報告(二〇一四年度)

文化事業担当 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのことをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。これまでの開催回数は一四〇回を突破した。二〇一四年度は新たな開催地として、大阪府、神奈川県、石川県、岡山県が加わり、全国一二都府県で一九回開催され、延べ約一九〇〇名の参加があった。

各地の開催では一般社団法人文化教育サポーターズ(東京都)、漢字を楽しむ会(遊(茨城県つくば市)などの団体の協力を頂いている。また漢字教育士による企画「姫路城漢字探検隊」も大成を収め、今後に繋がる取組として注目される。

学内他組織との連携事業

二〇一四年一〇月下旬から一月初旬の一週間には、立命館大学国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日特別企画」を本年も開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。また、同月には岡山で開催されたオール立命館校友大会で「立命館アカデミック企画・白川静と漢字教育」シンポジウムの運営に企画した(前号にて既報)。二〇一五年二月には「姫路立命会」総会に招かれ、講演を行った。

地域	回数	実施年月	テーマ	講座名	参加者数	場所
静岡	2	2013・5	人体	漢字ジェスチャー大会	120	静岡新聞放送会館
石川	1	2014・9	人体	漢字ジェスチャー大会	40	北國新聞文化センター
福島	6	2014・10		漢字あそび大会	309	こどもむく館(福島市)
岡山	5	2014・10	神	神さまと漢字	32	安積國造神社(郡山市)
岡山	1	2014・10	人体	漢字ジェスチャー大会	120	山陽新聞本社
香川	4	2014・7	食	うまげなお漢字	140	三谷町コミュニティセンター(高松市)
茨城	13	2014・12	人体	つくばの歴史と昔の暮らしに関する漢字の秘密を探れ	36	谷田部郷土資料館
茨城	12	2014・7	医療	医療と健康に関する漢字の秘密を探れ	52	筑波メディカルセンター病院
神奈川	1	2014・11	人体	漢字ジェスチャー大会	30	Z会横浜教室
東京	21	2015・2		古代文字を書いてみよう&漢字あそび大会	120	Z会御茶ノ水教室(千代田区)
東京	-	2014・8	番外	こどもアカデミア	80	アカデミア文京(文京区)
大阪	1	2015・2	人物	漢字ジェスチャー大会	95	柏原市民文化会館
兵庫	5	2014・11	建物	姫路城漢字探検隊	146	姫路城・姫路文学館
滋賀	8	2014・11	災害	災害・土木と漢字	54	草津市交流プラザ
滋賀	7	2014・6		となりの人間国宝さんと漢字をデザインしてみよう	77	草津市立志津小学校
京都	42	2015・3		漢字あそび大会	250	立命館朱雀キャンパス
京都	41	2014・12	神	神さまと漢字	48	石清水八幡宮(八幡市)
京都	40	2014・8		漢字のゲームを作って遊ぼう	93	立命館朱雀キャンパス
京都	39	2014・6	食	おいしおすえ漢字	85	京の食文化ミュージアム・あじわい館

「漢字教育士」「漢字探検隊」は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の登録商標。

他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、「漢字教育士」もすでに三〇〇名を突破した。神戸新聞文化センター（兵庫県）では「白川静の世界―漢字を楽しもう」を昨年度に引き続き開講した。シェアリングネーターチャーター協会（本部・東京都）のリーダー研修では「漢字と植物」をテーマに講義を開催、新たな可能性を発掘している。

自治体との関わり

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内に拠点校を設け、研修や学習会が開催されている。白川研からは、この事業の中枢機関である福井県教育研究所への研究会講師として、そして生涯学習の分野では福井ライフ・アカデミー主催の漢字文化講座への講師を派遣した。びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学校にて漢字・計算・英語の三検定の受検に取り組むようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、草津市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が二〇一一年度から始まった。二〇一四年度もワークショップを開催、好評を得た。

兵庫県朝来市和田山公民館での市民講座は二〇一一年度から始まり、四年目を迎えた。五月から一月まで連続開催され、座学の他に同年一月には同県豊岡市出石町まで遠征し「漢字探検隊」を開催した。大阪府柏原市でも漢字力の強化を目的に二〇一五年二月に教員講習会や「漢字ジェスチャー大会」を開催した。

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆きずなの力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行なおうとする試みを始めた。二〇一一年一〇月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、その後岩手県大船渡市での「漢字あそび大会」を開催、二〇一四年は一〇月に、郡山市の安積國造神社あさかくにつこで「神さまと漢字」の講座、福島市子どもの夢を育む施設・こむこむ館において福島大学・澁澤尚研究室の協力により「福島漢字探検隊―漢字あそび大会二〇一四」を開催した。また宮城県角田市の枝野小学校・西根小学校、山元町立山下第二小学校、岩手県大船渡市立吉浜小学校への出張授業を行った。また「漢字のまち」福島県喜多方市との交流も始まった。



姫路城漢字探検隊（2014年11月）



草津市立志津小学校への出張授業（2014年12月）

追悼—木村一信先生の職と学問

かずあき

所長 杉橋 隆夫

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所元副所長木村一信先生には、昨年九月二十六日逝去された。大阪成蹊短期大学学長として在職のまま、突然の訃報であり、告別式は同二十九日、高槻典礼会館にてキリスト教の式をもって営まれ、本学からも多くの関係者が参列した。

木村先生と私とは、専門分野も経歴の多くも異なつたが、前後して文学部長を務めたため、諸会議に同席し、偶に宴席を共にしつつ、学園・文学部の改革構想等について論を交わした記憶が鮮明である。葬儀お見送りの際に流された楽曲は、本人のカラオケ愛唱歌選だった。

先生の略歴を参照する

と、本学終盤期における役職には、文学部長としての兼職が多い。当研究所の副所長もその一つだが、これは単なる「兼務」以上の重

い実質的意味を持った。す

なわち、木村文学部長は本研究所設置当初からの副所長であり、法人常務理事兼務の高杉巴彦副所長とともに、多忙な長田豊臣総長・初代研究所長を補佐し、開設の準備から基盤構築ま

木村一信先生略歴

- 一九四六年四月二十四日 福岡で生まれ、大阪で育つ
- 一九四九年三月 関西学院大学文学部日本文学科卒業
- 一九七四年三月 同大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得退学
- 一九七九年四月 熊本県立熊本女子大学文家政学部国文学科助教
- 一九八四年三月 インドネシア共和国立インドネシア大学文学部客員教授
- 一九九一年四月 立命館大学文学部教授
- 一九九八年四月 学校法人立命館インドネシア事務所長（兼務）
- 二〇〇〇年四月 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授・学生部長
- 二〇〇四年四月 立命館大学文学部教授
- 二〇〇四年九月 立命館大学より博士（文学）の学位を授与される
- 二〇〇五年四月 立命館大学文学部長
- 二〇〇五年五月 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所副所長（兼務）
- 二〇〇六年六月 京都府立堂本印象美術館館長（兼務）
- 二〇〇八年四月 立命館総合ミュージアム館長（兼務）
- 二〇一〇年四月 立命館大学名誉教授・特別招聘教授
- 二〇一〇年四月 プール学院大学・プール学院大学短期大学部学長
- 二〇一五年四月 大阪成蹊短期大学学長
- 二〇一五年九月二十六日 逝去

で、今日に至る研究所の基礎を築いた功労者だといえる。研究所として衷心からの謝意と哀悼の意を表したい。ちなみに本誌創刊号には、白川静名誉所長の挨拶とともに、『白川研究所便り』の発行にあたって」と題する、木村副所長による文章が載せられている。丁度一〇年前になるが、IT技術の著しい進展のなかにあつて、文字の役割の重要性和研究の意義の拡大を訴えた文面は、当研究所発展の方向性を的確に指し示したものと見えよう。



在りし日の木村一信先生

木村教授のご専門は日本の近代文学であり、早くに『中島敦論』（双文社出版、一九八六年）を纏め、やがて『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年）へと展開させていった。こうした研究過程に培われた見識と人間関係は、たちまち立命館学園全体が注目するところとなり、立命館アジア太平洋大学設立の準備と事務所開設のため、インドネシア事務所長を兼務し、開学に際しては初代の学生部長に就任された。先生の場合、研究と行政（役職）とは、時にどちらかに重点を移しながらも、車の両輪のごとく展開した。立命館における終盤には、時の学園課題に応じて（白川研の根本理念にも関連するが）日韓間の研究交流に力を傾けておられた（木村・崔編『韓流百年の日本語文学』人文書院、二〇〇九年、他）。かかる両面に及ぶ能力が、より高次で広汎な世界へと導いたのであろう。学部長として二期目の任期を少し残して、他大学の学長に転じられ、さらにもう一つの大学の学長に移られた矢先の不幸だったのである。

享年六九とはいかにも不足だ。とりわけ同年の者には辛い。今さら返らぬ繰り言ではあるが、もう少しゆっくりと長く諸方に貢献し、交誼の継続を願うことはできなかっただろうか？ 惜しむべし、悲しむべし、ひたすら安穩を祈るのみ。

白川静先生歿後一〇年を

迎えるにあたって

所長 杉橋 隆夫

二〇一六年十月三十日をもって、白川名誉所長の歿後正一〇年を迎える。享年九六、みずから校正を済ませた新著がその翌年に出版されるなど、生涯現役の学者を貫いた大往生であった。

当研究所は、白川先生の文化勲章受賞を記念し、また先生ご自身による資金提供を受け、二〇〇五年五月に開設されたものであり、この間、研究所設立の趣旨である東洋文字文化の普及と研究に力を尽くし、多くの成果を世に送り出してきた。特にアジア地域を巡る近時の情勢は、東洋文字文化研究の重要性をますます昂進し、学内的にも日中韓を結ぶキャンパスアジア・プログラムの展開など、連携・推進すべき課題が少なからず提示されている。白川先生が想定した「東洋」世界の存在は、いっそう深い意味をもって現今のわれわれに問い掛けてきている。

本年、当研究所では、学内外の機関と協力・連携しつつ、出版や講演、教育・普及活動、白川先生の遺品等の巡回展示など、様々な記念事業を計画している。諸方面からの理解と支援とを期待したい。

ところで本機関は、「研究所」を称しているが、学内規程上は暫定設置の「研究センター」扱いとなっている。白川研の場合、二〇一八年三月をもって二度目の更新時期を迎えることになる。もちろんそれを機に付置研究所化するのが目標であるが、他方本学では、設置一〇年を迎える研究センターは原則廃止、継続する場合でも、以後は一年ごとの見直しとする規程が最近設けられ、実際に適用されつつある。当研究所は二〇〇八年に「研究センター規程」適用施設となっているから、まさに二〇一八年は白川研にとって重要な結節点になるであろう。

白川先生歿後一〇年となる今年、所員一同、改めて先生の学問と理想に思いを致し、記念の事業を完遂、もって「研究所」の役割を広く学内外に顕示し、支持を求めて行かなければならないと決意している。

白川静記念

東洋文字文化研究所

平井嘉一郎記念図書館における 白川静文庫閲覧室の設置について

二〇一六年四月、衣笠キャンパスに新しく平井嘉一郎記念図書館が開館します。新図書館二階には白川静文庫閲覧室が用意され、文庫の一部を閲覧することができます。白川文庫の蔵書が多くの人々に広く活用され、白川静先生の学問への理解が深まることを期待しています。

【白川静文庫】について

「白川静文庫」は、白川静先生旧蔵の書籍・研究資料を収蔵した文庫であり、白川先生は、生前に蔵書の一部を本学に寄贈いただき、また先生が逝去後には、御遺族の芳志により遺蔵の書籍・資料類を一括して寄贈いただきました。二〇一〇年、白川先生の生誕百周年を迎えるにあたり、本学図書館が両者を統合して収蔵し、「白川静文庫」を開設しました。

本文庫の内訳は、和書・中国書、漢籍古書、手稿・ノート類など、合計一万七千点余にのぼる膨大なものです。



平井嘉一郎記念図書館

白川先生が研究に使われた本には、御自身による書き入れやチェック、付箋などがおびただしく加えられています。研究活動の熱気が伝わるこうした書籍を、在りし日の状態のままに収蔵しましたので、白川先生の博大な学問世界を体感することができます文庫となっています。

【白川文庫の資料の紹介】

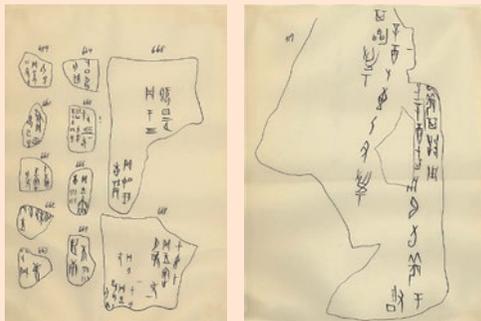
殷虚卜辞（いんきょぼくじ）（一九二七年刊行）明義士（一八八五～一九五七）の白川先生自筆トレース

明義士とはカナダの漢学者 James M. Menzies（一八八五～一九五七）の華訳名。

明義士は、中国の考古学、古代史研究に取り組み、甲骨卜辞の収集とその研究に顕著な功績を残した。その最初の甲骨著録集『殷虚卜辞』は一九一七年、明義士所蔵の甲骨五万片中より、二三六九片を選んで録したもので、これを白川先生はトレースされた。

卜辞の本質（ぼくじのほんしつ）

論文初期三部作の第一作目。『立命館文学』（六二二号、一九四八年一月）誌上に発表された。白川先生はそのなかで、卜辞を帝王の記録として見るのではなく、占いによる王の神聖化にその本質を求めべきであることを論じている。この論文に続いて「訓詁に於ける思惟しゆいの形式について」（六四号、一九四八年三月）、「殷の社会」（六六号、一九四八年九月）の二作が、同じく『立命館文学』誌上に発表された。



殷虚卜辞（一九一七年刊行）明義士（一八八五～一九五七）の白川先生自筆トレース



卜辞の本質